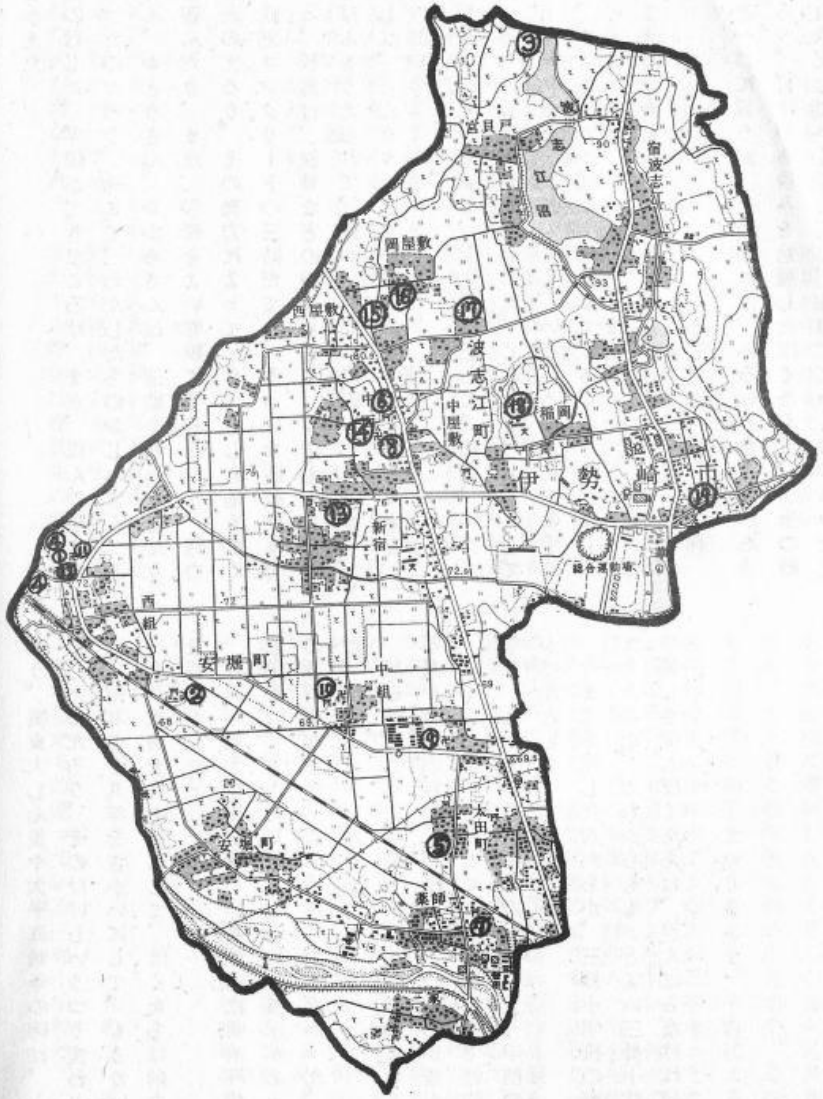
三郷地区の史蹟と伝説



①八坂遺跡　②御富士山古墳　③旧三郷村第74号古墳
④八坂樋跡　⑤安堀会輔堂　⑥愛宕神社　⑦五郎神社
⑧金蔵寺　⑨普光寺　⑩東光寺　⑪全東院　⑫経塚　⑬変型板碑　⑭薬師三尊仏　⑮阿弥陀三尊仏　⑯五輪塔　⑰道祖神
⑱権現山磨崖種子　⑲上岡玄藩供養塔

安堀の古名

安堀の古名を宇貫（ウヌキ）と呼んだと伊勢崎風土記にあるが、今でも西太田の南の土手下、広瀬川までをウヌキと呼び、わずかにその呼び名を残している。図書館の橋田友治先生は和名類聚抄の上野国佐位郡の郷名中に岸新という読み方不明な郷名があり、この岸新の郷は転写の際の誤りで宇軒の郷ではないか。草書体で書くと岸と宇、新と軒とは殆んど見分けがつかぬ程字体がよく似ている。宮郷地区の連取にも宇軒と呼ぶ字名があり、おそらく千数百年前の古墳時代には、これらの字名を持つ土地が一帯の地であり、現在の広瀬川（古利根川）はもっと南方を流れていたものと推定できる。千数百年前には今のように堤防を築いて一定の所を川筋とするような土木技術や水流を制御する知恵も持たぬ時代であった。だから河川は洪水のたびにその流域を変えて自由に低きを求め流れたはずである。宇軒の郷の地名にしてもこの古利根の流れに近い所に朝晩魚を求めて集まる鵜の大群が宿とした大樹があってこれがウノキと呼ばれ地名に残ったのではないかと話された。

八坂用水 ④

宝永三年（一七〇四）小畠武堯の計画によって完成した八坂用水（現佐波新田用水）は佐波、伊勢崎の土地およそ八千町歩をうるおした農業灌漑である。元禄年中の伊勢崎土地等級禄によれば低い土地の湿田が一等地と記されてあるが、天水による不安定な稲作の為にそうなっていたものである。

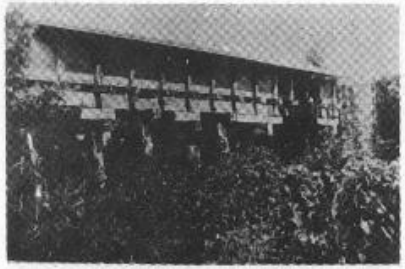
宝永三年を期にどの田にも水が引けるようになり稲作は力強い光明を得て、大きく転換した。この偉大な遺産とも云うべき堀も工事完成後、四十年で土手は崩れ、堀は埋って荒廃した。それを補修した当時の郡奉行は次のように残している。

（伊勢崎風土記より）

其の成功を石に勒んで、以て不朽に垂えよう。後の人々よ我らと志を同じくして、其の事を継いで、よく溝、濠を浚い水路を通じて民の事に便ずるように有れよ。則ち是こそ余のお願いなのです。詩に

始めあらずんば靡す
克く終り有るは鮮し
と後の人たちよ、厥れ焉を
思って下されよ

亨保二十有一年
丙辰春三月
上州伊勢崎候　県史
菊地武右衛門
藤原友輔



取りこわし前の樋　大正13年

用水路の一部に樋がかけられた（八坂樋）。用水路よりはるか低い神沢川を渡らせる為に使用したものである。その規模は莫大で、長さ百m、幅二m、高さ一mで木製のもの。完成時は板屋根がかけてあったと云われる。樋の跡は形としては何も残していないがわずかに大正十三年取りこわしの時に競買になった板（七～八糎厚）が八坂西組にあり、天保三年壬辰三月大樋の懸替工事が行われた。その時の「八坂樋修理帳」なる書き付けが波志江三丁目阿久津和民家にある。

この家は八坂用水計画当時より小畠武堯に大変協力したと云われる阿久津藤左衛門の子孫であり、工事完成後、五代にわたり奉行より水番を仰せつかっていた。その様子を天保四年（一八三三）「御新堀始まり日記」に詳しく書き残している。これは巻物になり同家（通称竹山家）にある。現在のお小屋（水番小屋）の東南の辺りを竹山屋敷といい、この家が水番していた当時住していた。

経塚 ⑫

波志江町三丁目四七五九

ガソリンスタンドの角にある石造物であるが、村人は経塚様といって三月八日と七月八日に八坂組内で当番が出て経塚のまわりに燈篭をたて、ローソクを灯して念仏を唱える。

その昔、七月八日が田植えで忙しく念仏供養ができなかった。その年に悪いはやり病が村に入り、大変だったことがあり、それが語り伝えられ、それからはどんな年でも、念仏供養が行われている。全東院の所有地でいつの頃かわからないが、この塚を移そうとしたことがあり掘ってみたらその下辺りかなり広く経文の文字を書いた石がうめてあり移せなくそのままになっていると伝えられている。

経塚の造りは割石を合わせて中に塔身を抱くように納め、正面は塔身が見えるようにあけてあるが、もとは石で四方が囲われていたと考えられる。造高七五cm程、上に蓋として割石と同じ石を使用し、更にこの上を屋根石で覆ってある。これは経塚の石室で八坂にあるのは石室そのものであるがもとは墳丘状に土でかくれていたものと思われる。

露出したままの石室は道路の拡張で身の置き所をせまくしやっと三叉路の角に建っている。経塚信仰は全国的には藤原時代に最も盛んで鎌倉、室町、江戸と時代の移りと共に盛衰をみせながらもその目的は極楽往生、自他法界平等利益から追善供養或いは現世利益へと変ってきた。江戸時代になって

から、その築かれる数は急激に減り、近い所で発掘解明されているものでは高崎市上中井の極楽寺の経塚が江戸初期（正保）のもので、是より時代の下ったものは殆んどないのではないかと云われているが、この地に江戸中期の経塚の有ることは大変貴重である。塔身は五十cm程の長さの六角塔で半分程地中にうまり次の文字が刻んである。

上野国佐位郡伊勢崎邑
小字八坂郷
享保廿年乙卯竜集
奉造立於石大乗妙法蓮華経立願亡七世父母典同□不明補地
十二月八日
愛宕山全東八世老前周峰和尚

以上の様に経塚を造る事に協力した多勢の人々の七世の父母の法界平等を願って建てたものである。この造塔の中心になったのは全東院の住職であった周峰という老僧であることが、この銘文によって知られる。

お産の神様

安堀町一六七六　阿久津尚傳家

江戸末期、いろいろな不解な神が奉り上げられたが、これも苦しみの中から生まれた庶民の信仰の対象であったといえる。「奉納天神」と書いた紙を中心に文政八年（一八二五）一月下旬と両脇に書き分けたものを芯軸に御封が三服、これでお産時の妊婦のお腹をなでるとお産がかるく出来ると云われる。お礼に生まれた子供の生年月日、名前を半紙に書き、水引きで結んで赤飯を重箱でそなえてお返しする。その度にこの紙は大きくなり八二、五cmもの胴まわりとなった。

中芯より外側まで一人子供が生まれる毎に重ねられた一枚一枚の紙と水引きでできている。芯の中を見たものには片わの子供が生まれると云われ、家人すら開いて見たものはない。

文政の頃は、江戸文化の最も発達した時期であるが人々は医学に対する教養もなく、人が生まれる事に対して大きな不安におののいていたと思われる。そんな時にわらをも摑む思いで始められた神頼みの一つと考えられる。

残された神楽

波志江三丁目五〇〇七　阿久津　清家

通称神楽家と云う。愛宕神社が現在地へ合併になる前、この家の先代が神社の掃除などをよく行い信仰厚き方だったので個人持ちのようにあずけられたが村有である。

春三月十五日、夏七月十五日には村中の人が出て祭りに当り、各家々を廻り悪を封じて歩き、また田植前の水不足の時など新堀の水中で雨乞いの舞いをまう。それで色あせてしまいましたと家人のお話。見ると歯が大分すれている。長年悪

い事を嚙んだ為かと苦笑する。最近は強制できない行事故、出る人が少なくなり、今年は取り止めになってしまった。

これら集落の信仰が今の合理的な考えのために、いつか失なわれ、すたれて行くのは残念な事である。

会輔堂のこと

文化八年（一八一一）辛未の歳、春三月に茂呂、安堀、下植木三村の里民各々学堂を建てて、其の地と名とを候に請いき、命じて、茂呂には遜親堂、安堀には会輔堂、下植木には正誼堂と日えり

会輔堂 ⑤

この堂は論語顔淵篇に「曾子日、以文会友、以友輔仁註ー講学以会友、則道益明、取善以輔仁、則徳日進」の「友を会すれば道はますます明らかとなり、以て仁を輔くれば徳が日日進む」からとったものであり、三人寄れば文殊の智恵というほどの意味である。（伊勢崎風土記より）

現在では堂跡などもなく、吉沢医院の北辺りに有ったという言い伝えだけが残っている。

住居跡と古墳 ①②③

人が住んだから住居跡が有り、そして古墳ができた。だが八坂、安堀にあった古墳は殆んどこの十数年の間に無くなってしまった。

そんな中に住居跡だけは、無言のまま、現住人の邪魔もせず地中深く眠っている。これら無名の宝は時折り深所まで耕された時、偶然掘り出され、大さわぎされる。

石器（石斧、石鏃）よりはじまり土師器、縄文、弥生、須恵器にいたるまでこの辺りからは発見され、人の住んだ径路を語ってくれる。古利根東岸といわれるこの地は、高台であり、湧水あり、人の住む条件を備え持つ地故か人の絶える間もなく住まわせ、その生活は、川の端故漁、猟を中心に発展し古墳文化と共に同じ所にその跡を残した。この土師器の中にこしき或はむしきともいわれる器が時代を隔てて二点あることから古墳時代に生きたこの地の人々も稲作をし、米を食していたと考えられる。

古代、古墳文化は文献的に明らかにされていないため、形として残っている古墳や遺物に合わせて、その時代と推定するまでである。そのため遺物や文化財は史実を正しく伝える唯一の証拠品として大切であり、これらをできるだけ、そのまま保存するのが、その時代に生きた人の責任と思う。

高柳喜一郎氏によって発見された土師器

地蔵尊一体

安堀町石橋茂氏宅南東の桑畑の中

土地の人達はつんぼ地蔵、咳地蔵と呼ぶ。像高五十cm程、名前のとおりつんぼの地蔵様なので「トントン」とたたいて願かけをしたといわれる。その為か像形はすっかり失なわれちょっと見ただけでは唯の自然石にしか見えない。大変御利益が有ったといわれるが今は知る人ぞ知るで桑原の片隅で辺りの雑草も伸びるにまかせ、その下にじっと座す。赤城安山岩、中世の石仏といわれる。

宝塔 ⑥

所在地　波志江町　愛宕神社境内

造立年　鎌倉時代末期

非常に古雅な趣をもった宝塔である。宝塔と云うのは基礎（台座）、塔身、屋根、相輪の四つからなる塔婆であるが、赤城神社の宝塔は屋根と塔身との間に、球型の五輪塔の水輪が、余分に積まれている。更に屋根の上に立っているのも相輪でなくて五輪塔の空風輪である。塔身は、つぼ型で下植木赤城神社の観応二年（一三五一）造立の県重要文化財の宝塔と同型式である。注目されるのは宝塔の基礎の部分に、美しい曲線を持った格狭間が刻まれている事で、特にこの宝塔の曲線は鎌倉期の特長である。しっかりしたふくらみを見せ更に格狭間を囲む輪郭の内部に「故宿赤城神社有」と云う七文字が陰刻されていて、この宝塔が赤城神社と関係あるものと知られる。赤城神社といえば金蔵寺の西隣に社があり賑いを見せていたが後に愛宕神社に合併された。この宝塔はその赤城神社のものであろうか…。只故宿とはどうゆう意味あいのものなのか新宿という地名に対する故宿なのか今もって解けぬ謎である。

阿弥陀三尊石仏 ⑮　（市指定　文化財）

所在地　波志江町　岡屋敷葬儀小屋内

凝灰岩製、阿弥陀立像、脇待梵篋印

高さ九十六cm、阿弥陀像を中心に左右に勢至菩薩と観音菩薩を配したものである。

鎌倉末期のものといわれる。

変型板碑（市指定　文化財）⑬

所在地　波志江町三丁目　大正寺跡

造立年　明応二年（一四九三）七月二十八日

先祖供養のため建立されたもので、安山岩製、高さ九十三

cm、胎蔵界大日如来を梵字（アーク）が蓮台に刻まれ、上部は切妻型、「明応二年」の銘があり彫刻も精密で室町期の特徴をよく表している。碑には、

敬白
奉造立　石仏二座
願主　道保女……
明応二年癸丑七月二十八日

と四行に書かれ、特に石仏二座と刻まれていることを考え合わせると、この板碑と一緒に同所に石仏が二体あるべきなのに見当らない。金蔵寺境内の薬師石仏と阿弥陀石仏がこれのように思えるのは先走った考えであろうか。この二体とも板碑と同時代の作品のように思う。現在板碑の前に建てられている石仏二体は江戸期のもので文政十年に周囲の石垣と共に奉造されたものと思う。伊勢崎の変型板碑、青石塔婆は鎌倉期から戦国末期にかけて関東各地に建てられ、阿弥陀観音、勢至観音の仏を刻んだ供養塔が多いが、密教金剛界の大日如来の梵字バーンの造立によるものは少ないといわれている。

道祖神 ⑰

所在地　波志江町
中屋敷屋台小屋隣
造立年　慶応四年（一八六八）
九月吉日
高さ　一m四十cm
巾　一m二十cm

この道祖神は足の悪い人がワラジを供えると足がよくなると口伝されているもので最近までワラジを供える人がいたという。又道祖神の「道」という字が非常に美しく、一説には矢内（半済家）の初代新蔵氏が書いたともいわれ、異色の道祖神である。

五輪塔 ⑯

所在地　波志江町　岡屋敷畑中

鹿沼和太郎氏の畑中に、五輪塔と思える石塔がある。安山岩製、高さ九十cm、五輪塔の型式からいえば現在残っているのは、地輪、水輪、火輪の部分であるが、水輪は球型ではなく大きい感じのつぼ型になり、火輪の軒は厚く真反を示し、いわゆる五輪塔の型にはまらぬ水輪で全体的に、おゝらかな感じを与える石塔である。造立年も梵字も刻んではないが、やはり鎌倉期の作品のように思う。長い年月の風雪に破損もひどくこのまゝ捨て置くのは惜しい石造物である。

屋台

波志江の一丁目・二丁目・三丁目合わせて十二部落の内八坂組だけ所有せず、他一部落一台の所有で計十一台、いずれの屋台にもはっきりした製作年は刻まれていないが、安政から文久（一八五四～一八六一）の時代にかけて造られたようである。それ以後昭和初期に迄、部落の若衆によって嘶され受けつがれ、一時は関東一の名を挙げた事もあったようであるが今は虫干しの時以外は倉から出さず、殆ど使用されないまゝでいる。この屋台は波志江の愛宕神社奉納のため、十月十七日の秋祭に供されその前後、つまり十月十六日のエイ晩と十七日の引返しの晩と大きな祭になる。屋台の規模としては、総欅造りで巾九尺、長さ二間、高さ一丈が屋台一台の標準で車も全て欅で直径四尺である。特色としては彫物の巧さと美しさではないだろうか。棟或は柱に施された彫刻は例えば昇り竜、花鳥、唐獅子等、それらが欅の一枚板にすかし彫されている様はまことに豪華絢爛である。屋台の前面踊り場は各部落の意匠をこらした人形等が飾られ嘶以上に人目を惹いたと云伝えられ、屋根には部落の戸数だけ提燈を取付け、屋台を引く時は囃は少年組と青年組で受持ち長老の掛声と共に部落の男達が引いたようである。囃の内容は、笛が一人、鐘二人、大胴一人、小鼓四人が一組で囃曲目は、サンテコを主にサンテコくずし、神田ばやしとショウデン等がある。とにかく屋台が皆の前から姿を消してから久しい。市の文化財として保存を願うと共に、一度その華麗な姿に接したいものである。

愛宕神社 ⑥

所在地　波志江町

明治四十二年に、愛宕、七社、近戸、今宮、諏訪、赤城、浅間の各神社が合併し、愛宕神社と称した。最初は八坂全東院西の古墳の上に建立されていたが、後に中の面に移され、更に大正二年に現在の所に置かれた。波志江の中心に置きたいという住民の要望から、そのようになったようである。

五郎神社 ⑦

所在地　太田町

伝説によると広瀬川が往昔利根川の本流であった頃に一本の箭が流れて来たので里人がこれをひろいもっていた処がその後しばしば霊異があり「五郎権現の垂跡なり」という御神託があり、その命にしたがい崇め祀り鎮守様としたと言う。往古利根川の本流が宮下（安堀町）の前を流れていたのは、鎌倉時代か下っても室町時代初期と考えられる。「箭」は戦国時代に盗まれ今は木像が神体として祀られている。木像は衣冠の壮士で左眼を閉じている。冠は折烏帽子で衣は狩衣である。

寺院

金蔵寺 ⑧

天台宗、東叡山末寺、号高林山と称す。金剛界の金と胎蔵界の蔵をとり金蔵寺と名付けた由。寺の歴史も古く現住職の竹田暢典氏が四十二世、元和元年迄華蔵寺の末派で波志江の名主上岡玄蕃の事件で華蔵寺の支配下から去ったと言われているが金蔵寺はそれ以前に独立していた寺で、むしろ華蔵寺より建立も古かったのではないかと思う。末派には大正寺、円満寺、門中には持明院があった。

全東院 ⑪

愛宕山全東院　曹洞宗
本尊　釈迦牟尼　同聚院の末寺　波志江町八坂

東光寺 ⑩

原里山東光寺　天台宗
本尊　阿弥陀如来　華蔵寺末寺　安堀町中組

普光寺 ⑨

富士山普光寺　天台宗
本尊　勢至菩薩　華蔵寺末寺　安堀町字本郷
本堂は文化三年（一八〇六）に太田市脇屋山正法寺の観音堂を移建したものである。

波志江の石造物

権現山の磨崖種子 ⑱

所在地　字稲岡権現山々頂
造立年　不明であるが表面の薬研彫の梵字を「バイ」と読み多聞天の像を刻む代りに文字で表現したもので、このような例は鎌倉時代に造られた板碑などにも多い形式といわれている。

薬師三尊仏 ⑭

所在地　金蔵寺境内
造立年　不明、新宿の変型板碑と同時代と推定される

阿弥陀三尊仏 ⑮

所在地　下波志江会議所前
造立年　嘉永五年

五輪塔 ⑯

所在地　岡屋敷　細井喜平治氏宅内
造立年　鎌倉時代

庚申供養塔 ⑰

所在地　中屋敷屋台小屋隣
造立年　享保八年

宝篋印塔 ⑧

所在地　金蔵寺境内
造立年　寛保二壬戌天仲冬吉祥日

波志江の遺跡

波志江館

字下波志江に波志江氏の館跡がある。「居堀」と呼ばれている所は、方七〇mにすぎないが東北の金蔵寺や南側の環濠地もその郭城であったと推定される。

岡屋敷

字岡屋敷には中世のものと推定される屋敷の遺構があり、東西南北共一五〇mの広さをもち、四周の堀と北部の土居とが遺っている。細井喜平治氏の屋敷である。

中屋敷

字中屋敷も中世の遺構であろう。東西一〇〇m、南北一三〇m程の地域に堀をめぐらしているが、更に南に三〇mばかり拡っていたかもしれない。

地名で「西屋敷」もあるが遺構は不明である。中之面には中野屋敷跡があり、わずかに堀跡をとどめている。

埋蔵文化財

八坂遺跡 ①

波志江町字新堀下四七一五
縄文時代後、晩期（二五〇〇～二〇〇〇年前）の遺跡、焼土を伴なう配石遺構と多数の土器（安行式、大洞式）、石器（石斧）、獣骨片（イノシシ、シカ）　炭化物が出土した。

御富士山古墳 ②

市重要文化財
市内最大の前方後円墳、五世紀、高さ九m、全長一二五m、葺石、埴輪円筒列が認められる。未発掘のため詳細は不明、古墳上の石棺は、周辺の古墳から出土したものをここに置いた。頂上には浅間神社を祀ってある。以前には本墳の周辺に多数の円墳が存在していたが開墾のため平夷されてしまった。

旧三郷村七四号墳（市水道局調整池内）③

波志江町二八三三
円墳（山寄せ古墳）東西二十一m、南北十八m、高さ二m、横穴式両袖型石室、石室長五八、二m、玄室幅十四、五m、高さ十七、五m、羨道長二、一三m、幅〇、六五m
金銅製耳環一、刀装金具破片一、尖根型の有柄鉄鏃破片十六が出土した。七世紀終末から八世紀初頭

西太田下古墳

安堀町字西太田下一一五一
円墳、横穴式両袖型石室、羨道奥幅〇、七三m
石室の状態は破壊のため不明

安堀古墳

安堀町字西太田中一〇七五
前方後円墳、石室の状態は破壊のため不明

三郷地区の史蹟、伝説のページは、
伊勢崎市文化財調査委員
波志江町二丁目　川村勝保氏
安堀町　阿久津怜子氏
三郷小学校　細野雅男先生
三氏の御協力により、できたものです。
㉑史蹟、文化財の下の数字は90ページの地図上のもの。